

(みんなのお父さん)

前作「ゆりっぺ」
改変・改題



話を聞いたからと言って、特に自分で料理を作ろうと思ったわけではないのですが、出てくるものが、どういう手を加えるとそのような姿になるのかに幾分興味があったのと、離婚を経験した五十代半ばの男が一人で来て、そうそう偶然に、見知らぬ人がいい話し相手なることもそんなにはないので、お店の板前さんとお話をするようになりました。若いのに研究熱心なのですが、お堅いところもなく話し方にも誠意が感じられるし、人当たりもいい。趣味はというとロック。しかもギターを自作したりもする。そのせいか女のお客さんにも人気のあるちよつと面白い人でした。

ある夏の夜、同じカウンターの並びの一番左奥に、㊄代後半かもう少し上の小柄な女の人が座り、なにやらこちらをじろじろ見ていました。その日初めて見る人でした。

話し方や振る舞いが少し他のお客さんとは違うような感じがしました。ちよつとずれている感じがして「幾分浮いているかも」と思いましたが、どうやら僕と同じで、その人もこの若い板前さんがお気に入り入りの様子。盛んに話しかけています。と、同時にやはり時々、こちらをじろじろ。それで、板前さんを頂点にした二等辺三角形の二辺は交信があったのですが、ぼくとその女の人を結ぶ底辺の交信はありませんでした。

その数日後、再び同じ配置になりました。なにやら今度は、

「マイセンのカツサンドをたくさん買ってきたからみんな食べて、お客さんにも」と板前さんに差出し、若い板前さんも

「毎回恐れ入ります」

と答えているので、幾分退屈をしていたこともあって、敢えて

「たいそうお金持ちですねえ」

と声をかけると、

「あなたもおひとついかががかしら？おいしいのよ、これ」

と言いながら

「そちらにいつでもいいかしら？」

と僕の返事を待たずに、にこにこしながら隣の席に移ってきました。そうして、「あなたこの前、お見かけしたときに、お隣の方に、たばこ吸いますが大丈夫でしょうかとお訊きになっていましたでしょう？近頃珍しい御紳士な方でいらっしやることと思つて・・・」

元々が、子供の頃から余り好き嫌いをせずに、誰とでも仲良くする質（たち）なので、程なく、それから何度か日時を決めて、お店で会うようになりました。そのたび毎に、日本橋高島屋のどこそこの売り場のお土産だと言って、板前さんにそれを差出していました。がよく見ると、受け取るときに、ほんの少しためらいのようなものがあるのが感じられました。本人は何も感じていないようでした。とにかく日本橋高島屋が大好きなようで、日本橋の高島屋以外はデパートとして認めていないみたいでした。

訊くとその人は、高校までアメリカで暮らしていたそうです。そのせいかどうか分かりませんが、全く唐突に、かなり場違いなタイミングで英語が飛び出すのです。ところが、時々使う、本人だけは「ここぞ」とばかりにねらったつもりの、その場違いなタイミングの英語の発音が何故かとてもへたくそなのです。

まず、長文は話しません。発音も巻き舌ではなくて、なんだか舌の中に直角三角形定規でも入っているような感じ。水を米語の発音では「ワラー」というべきところ、なにやら「藁（わら）」に聞こえたり、気にしなくていいよ、の「ドンマイんぬ」が「呑舞（どんまい）」に聞こえたりします。なんだかちよつと胡散臭い気もします。確かにお金はありそうですが、何かちよつと変なのです。

甚だ恐縮だとは思いましたが、発音だけとれば、僕の方がまだましかもしれないと言う感想を抱いてしまうレベルとは？

相当の年月、彼の地で暮らしたはずなのに、ここまで発音が直角、カタカナ読みなのは向こうで何かそうなる事情があったのかもしれない。例えば、暮らしていたのは外国だけれども、居場所としては自分の部屋ばかりだったとか・・・引きこもっていたとか。今見ると華やかに見えるけれど、ひとはわからないものだから。



そのうちその人は、初めはとても淑女然としていたのですが、暫くすると横にびったり張り付いて、間においてあるお皿に乗った煮魚の身を箸でぐちゃぐちゃになるまでほぐしてから

「はい、あーんして、たべさせてあげるからね」と言った後、
「おいちい？よかった！」

とまるで二十代の「彼女」のようになり、次は

「ホールのあの子、あなたを狙っているわよ。そんなこと、させないから、来たら噛みついてやるわ！」と夜叉にもなり、最後は僕に対してどこまで本気なのかかわからないのですが「おだまり！シヤラップ！頭が高い、静かにおし！」

とまで言うように。

食べ方もあまりキレイではないし、味も音痴に近い方かもしれませんが、あるときには突然

「わたし男の人とああなるのキライなの。ああいうふしだらなのイヤなの！分かる？ユーノウ？ビッグボーイ」

と直角三角形定規の発音でなにやら爆弾発言らしきことを。とにかくお酒が入るとすぐにできあがってしまうようです。

「わたし、頭のいい人好き。それに、どこに住んでいるかなんて訊かないところも」といいつつ、こちらから質問したわけでもないのに、自分は実業家の一人娘で、家にはお手伝いさんが居たこと。家族と帰朝後、ミッシヨン系女子大に進んだが、卒業後働いたことではないこと。父親がゆりっぺ、ゆりっぺと猫かわいがりしてなかなか手放してくれなかったので、結婚は37歳までしなかったこと。結婚した相手は鉄道技師で、週に何回かは泊まりで帰って来ないこと。料理はしないで、ほとんど出来上がったものをお取り寄せするのだが、主人は文句を言わない。そういう約束で結婚したのだから、ということ。お子さんは、自分みたいなのももう一人居ては相手をするのにこまるので、作らなかったこと。父上は既に他界していて、莫大な遺産を、そんなにあつても仕方ないけど、相続だけはしたこと。ここで飲んだ後は、いつも六本木のバーに行つて、みんなにドンペリをおごっていることなどを酔った口から、ここに書くのが大変なほど、ひとりですんどん喋ってきました。

そんな話を聞いていてふと思ったのですが、この人は、母親がいなかったんだろうなと思いました。滞米時の暮らし向きは知るよしもありませんが、本邦においては、長いこと父一人、娘一人。いつもお取り寄せかお手伝いさんの料理ばかり。料理を作ったこともなければ、作ろうと思つたこともない。作ってくれともいわれなかったから。でも父娘、仲良く暮らしていた。

それともう一つは、なんだかとても焼きもちやきで、こころの振幅もかなりあるひとだなどとも思いました。焼きもちについていえば、「嫉妬」や「ジェラシー」ではなくて、「焼きもち」。お目めメラメラではなくて、ほっぺをぷーつと膨らますような。

例えば、その人がいないときに、僕一人で行つて、ほかの女のお客さん、それはもう80歳のおばあさんを囲んでの二、三人の女性だったので、僕がそのグループと仲良く話

しているのを入りしな目ににして、僕と目が合った途端、「ぶい」とへそを曲げて、お店から出て行ったりもしました。

お店の子に噛みついてやると言ったことや、ぶいと出て行ってしまったことを思い合わせる時、この子、といつては失礼なのですが、なんとなくやはりこの子としか言いようがありませんので、この子は、まるで大好きな親戚のお兄ちゃんを盗られまいとする、兄妹の居ない女の子が「くるな！ここからあたしの陣地。私のお兄ちゃんよ。家来は私だけなの。わかった？さわんないでよ！あっち行け！」みたいな感じがしたのです。他の人には女王様然と振る舞うのですが、何故か僕に対しては、まるで小四の女の子みたいに振る舞っていました。

しかも、勘が強くて、焼きもちやきの子なので、確かにいると問題は起こすし、そのくせまとわりついて、いささかうるさく思うこともなくはないのですが、居ないとなくなくと物足りなくもあり、妙な心境というか、気分でした。



そんなある秋の夜、かなりのレベルで酔っているのに、六本木のバーに行こうとするので、心配になって

「ゆりっぺ、もう帰った方がいいよ」というと

「おだまりっ！誰に向かって言ってるの？私に指図しないで！」と吠えた後

「ご主人様じゃないんだから、ゆりっぺ、なんてなれなれしく呼ばないで！百合子様とお呼びっ！！」

と更にご機嫌斜めになり、それでもよたよたしながら行こうとするので、やむなく電車と一緒に歩いて行きました。

「わたしの心配？そう？だったら、嬉しいわ。許してあげる。かわいいっ！」と、今度は甘えん坊さんの殊勝な態度です。

ところが、お店に入る直前になって

「子供じゃないんだから、平気よ、早く帰ってよ。あたし、みんなに優しい人なんて大っ嫌い！」

と、僕の何がご機嫌を損じたのか分からないまま追い返されました。

しかし、それでもやはり心配だったので、バーのあるビルの外に出て待っていました。

もう午前の一時を回っています。小一時間ほど待ちましたが、お店から出てくる様子がないので、ビルの階段を上がってお店の前まで行くと、その子が重そうなドアの前の床に突っ伏して眠っていました。しかもお漏らしをして、その水たまりの中に。驚いたことに、大きい方も、一本ごろりとおわしまして。おそらくスラックスパンツを脱いだのかも。

ちょっと困りました。いや、かなり困りました。いやいや、おおいに困りました。

見て見ぬふりをしようと思いました。ひよつとして、本当は眠ってはいないで、薄目を開けているのだと思うと、出来るだけ静かに、気づかれないように後ずさりをして階段を忍び足で降りました。ドンペリを毎回頼む上客に、お店はこんな扱いをするだろうか？ということ进行い合わせると、何か見えてはいけないものを見てしまった、恐怖とも罪悪感ともつかない気持ちに襲われました。

しかし、放っておく訳にはいきません。仕方がないので、タクシーを呼んで、無理矢理抱え上げて、くずおれるように二人でバックシートに転がり込みました。

タクシーの後部座席で、その子は本当に眠っているのか？本当は起きているのか？よく分かりませんでした。とにかく何も気づかなかった、見なかったことを印象づけないと、と思い、なにやら独り言のように、いろいろおとぼけの絵空事を言ったのですが、それが役に立ったのか立たなかったのか分からないまま、2万円を払ってタクシーから降り、運転手さんにお客さんを起こしてから、言うところまで届けてあげてくださいと頼んで、地元の駅のタクシー乗り場から小一時間かけて歩いて自宅に戻りました。多分もう、連絡してこないだろうなと思いました。



ところが初冬のある夜、また、その子はお店にやってきました。そうして、ここは飽きたからほかのお店に行こうといいだし、別のお店に移りました。

そこは居酒屋さんなのですが、半個室のボックス席になっていて、席に着くなり

「わたし、このオーナー社長と懇意にしているの。ちゃんとサービスするのよ！」

とお店の人を一喝。あまりの唐突さと、場違いな権威の発揚を、こりやちよつとまづいと思つた僕は

「自分がもしそんなこと言われたら、どんな気持ちになる？却って逆効果じゃない？やめた方がいいと思うよ」と言うと、

「それもそうよね。アツタマいい！殿、好きよ」

と言つて、唇を押しつけてきました。ぼくはお店の人が見ているからと、遠慮をしたのですが、その子はなかなか離れてくれませんでした。

ふと見ると、靴を脱いで上がった板張りのボックス、そのテーブル下のやや厚手のウール地の靴下に穴がいているのが目に入りました。お金持ちの奥様の靴下に穴ぽこ？

そういえば、お金持ちの奥様の割には、スカートをはいている姿も、和服の姿も見たことがないなと思いました。いつもストラックスかジーンズです。

その後、暫く飲んだあと、僕は外に出て、少しふらつく身体を支えてあげながら、駅まで連れだって歩いて行きました。そうして別れ際、拒むように遠慮したり、靴下の穴ぽこに気づいちゃったりして、ちよつと可哀想だったかなと思ひ、酔っていたせいもあつて、僕は駅、改札前の人通りの多い中で、殆どさばおりをするみたいに、その子をぎゅーっと抱きしめました。

その子の身体が後ろにぐぐつとのけぞりました。ぼくは力任せにさばおりを続けながら「大丈夫、大丈夫、ちゃんというから」

とところの中でつぶやきましたが、それが通じたかどうか？その子は、今までになく腕の中で、消え入るくらい静かにしゅん、となっていました。



その後、その子と会うことはありませんでした。夏に知り合い、秋を深めて、大晦日が過ぎ、年明け暫くして、聞いていた携帯の電話番号に電話を入れました。

以前もお誘いの電話をしても出ないことが多々あったので

「これじゃあ、電話番号を教えて貰った意味がないと思うけど」と言うと

「ご主人様がいるんだから、そのくらい分かるでしょ？」
と言われたことがあります。

それでも、あの後、暫く何度か電話をしたんですが、出なくて、ダメモトだろうと思いつつ、出てほしいのになと思っかけてたところ、数回のコール音の後、誰かが電話に出ました。

鉄道技師のご主人でした。

「はい、百合子の夫ですが」と。
慌てました。

ご主人が、その子の電話を取り上げてしまった？見つかったの？

僕は当時、離別した後のひとりもので、問題はなかったのですが、相手にとっては「不倫」と言われても仕方がない状況です。まずい！ちよつとした知り合いで、たいした用事ではないんですと言おうとしたとき、

「生前百合子がお世話になられた方ですか？ありがとうございます。百合子は昨年クリスマススイブの前日、23日の深夜に亡くなりました。お風呂の浴槽で溺れ死んだんです。さみしかったです。本当に可哀想なことをしました。私も留守がちで。それで毎晩飲み歩いて、とうとうその日も、泥酔して帰ってきた後、お風呂に入って、蛇口を開きっぱなしにして眠り込んで溺れてしまったようです。朝仕事から帰ってきて、返事がないので、家中あちこち探し回って、お風呂場で見つけました。何が起きたのか分かりませんでした。茫然自失でした。

警察が不審死として、調べにも来ました。慌ただしい年の瀬とお正月でしたが、やっと少し落ち着きました。どちら様か存じませんが、出来れば百合子の冥福をいのつてやってくださいまし」

心臓がどつくん、となって、一回転空回りをしました。血液を上手く送り出せなかったので、胸のあたりが苦しくなりました。たばこの燃えさしがぼろりと落ちました。何も耳に入らなかったとも思います。家族の中の誰かが死んだような気分でした。



一体あれはなんだったのか？おつきあいをしたのか？不倫をしたのか？それとも親戚の中三のお兄ちゃんが、一人っ子で兄妹の居ない小四の女の子の遊び相手になってあげただけだったのか？

そういえば、お兄ちゃんという言葉で、ふと思い出しましたが、一度だけ僕が声を荒げたことがあります。この親戚の小四みたいな女の子のあまりのわがまま、ご無体を年上の男子としてさすがにこらえきれなくなり

「僕はキミの家来ではないっ！」

と乱暴に立ち上がり、その子を置き去りにして、お店から出て行ってしまったのです。

その後、その時のことを話す機会があつて、この子が言ったのには

「あの後、わたし、追っかけたのよ。探し回ったの。駅までも。駅の反対の改札までも。追いかけたなんてはじめて。今まで誰からも怒られたことなかったから」といつていました。

だから心を入れ替えてそうしたのよと言うことを聞いたのかどうかはよく分かりませんが、その後続けて、これまた唐突な話の展開にしか思えない切り出し方で

「街頭の「あしなが募金」に一度に ∞ 万円を寄付したら、周りから変な目で見られた、大きなお世話よ！可哀想な子たちにはお金がいるのよ！
と言つてもいましたっけ。

今思うと、なんとも気まぐれでとらえどころのない子でした。本人は別に人を煙に巻くつもりも、煙に巻いてそれを楽しんだりするつもりもさらさらなくて、ただただ自分に正直にしているつもりらしいんですが、ぼくや僕を含めた周りからすると、いつていることややっていることが、何故そう言い出すのか？何故そんなことをするのか？その答えを見つけるのがそうたやすくなくて、「よく分からない」ことだらけになったりもしていました。

しかし今思い当たつたんですが、本当を言うと、見ていられなかったのだと思います。危なっかしくて。この子、この先どうなっちゃうんだろうって。通りすぎようとして、通り過ぎられなくなっちゃったんだと思います。放っておけなくなつてしまつていたのかかと。



それから数年が経ちました。

その間に僕は他の人とお付き合いをし、程なくお別れしました。その別れ際に、お付き合いをしたひとが

「みんなのお父さんになりたいだけなのね」

と言ひ残して去りました。

何故か、その後ろ姿がゆりっぺと重なり、お兄ちゃんではなくてお父さんと僕がゆりっぺに抱いた感想と、その後お付き合いをした人の僕に対する感想が食い違っているのにある疑念を抱きました。

「みんなのお父さん？」

路傍の石を？みんなのお父さんが？拾ってあげた？助けようとした？天にまします我らの父として？お兄ちゃんではなくてお父さんとして？

そういえば、今思い返してみるとぼくは、ゆりっぺの後にお付き合いをした人も含めてお父さんの居ない子や、おとうさんの影響が強すぎるための問題を抱える子によく好かれていたことに思い当たりました。

初めての恋人もそうでした。その子は父親の代役として僕のことを好きになったのです。そうして、そのことに気づいて去って行っちゃった・・・

もしかして、僕は、問題を抱えている子を敢えて選んできた？何故？糧にしようとしていた？何の糧に？

対等ではない。庇護する立場。遠目に見る立場。救う人間。手を差し伸べる人間。多分上から。余裕を持って。余裕綽々で。手のひらの上で。遊んでいいよって。天にまします我らの父。僕だけが知っている本当の姿。僕だけが知っている真実とその救済方法。選ばれし救い主のいい気分。情け深き父。博愛の極み。

何の糧に？みんなのお父さんになるために？つまり、天にまします我らが神さまになるために？

「これって宗教じゃないか？」

だからある距離以上には入ってこない。あるいは、入ってこられない。こちらも出て行かない。出て行かないと言うより「下に」降りない。

それじゃあ男と女になりきれない。いや、なるわけがない。恋愛ではなくて親子か師弟。それで去られる。いや、それじゃあ逃げる。

恋人になろうとしていなかった。夫婦にもなろうともしていなかった。だのに恋人になり、夫婦にもなってしまった。父が娘をいたぶる近親相姦みたいな妙なもの。そうして自分のことは棚に上げての、非常に巧妙且つ迂遠で遠回しなモラハラ？いや、巧妙且つ迂遠という頭在意識レベルでのそれより更に悪い、潜在意識レベルでの「意識操作」？いや、いや「無」意識操作？これは余りにも・・・

天にまします我らの父は当然女の人はお付き合いもしませんし、結婚もしません。いつも独りです。それは神さまの絶対条件みたいなものなのかもしれません。

その絶対条件を守るために、天にまします我らの父でいるために、殆ど無意識レベルでの、実に巧妙にカムフラージュされた手口を使って、常に独りでいるために、その孤影、いや、弧を描いて、その内側に人を入れず、自分もまたその弧の外に出て行かない、弧の中に独りの「孤独」を守るために、僕はこころ密かに相手の方から去るように仕向けていたのではないか？

にわかにはわき上がったその疑問を前に、僕は酷くたじろぐと同時に、やがてそれは確信に変わり、自分が、みんなのお父さんどころか、何か見るのもおぞましい、怜悯な月明かりの下で、隠された本性を浮かび上がらせる冷たくひえ切った「蠟性（ろうせい）の魔物」のような気がして、自分自身に青ざめていくのを感じるのです。

（おしまい）